2011年11月　第39号

日本小児看護学会

Japanese Society of Child Health Nursing

News Letter

日本小児看護学会第21回学術集会を終えて

学会長　小木曽國子
（埼玉県立小児医療センター）

日本小児看護学会第21回学術集会は、７月23日～24日に彩の国・埼玉の地で開催されました。７月は猛暑が続いている合間に台風到来があり、自然災害や気象の変化に一喜一憂している時期でした。

３月11日の震災以降、埼玉県内でも繰り返し続く余震と福島原発の影響による節電が学術集会開催期間中も続いていました。担当者として、どのようなアクシデントがあっても臨機応変に対処しようと互いに心に秘めながら進めてきました。臨床の看護職が、学術集会を担当するのは数年ぶりです。そのため、看護教育関係者・臨床関係者との協議を繰り返し重ねてきました。

今回、学会テーマを「子どもたちの未来は私たちの未来－保健・医療・福祉・教育の絆－」と決めるにあたり、臨床の立場で伝えたい議論したいことは、強みは何かを自施設の看護師一人ひとりにも発信し、声を拾い上げていくことから始め、教育・臨床の現場でご活躍の委員の皆様と協議し、キーワードを未来・絆、そして医療現場での大切な連携機能として保健・医療・福祉を掲げることになりました。

企画の段階で、看護職以外に行政・大学で特別支援学校の教育に携わっている方に企画委員に参加していただき広い視点で検討することができました。

特別講演では、あいち小児保健医療総合センターで子どもの診療に携わられた現浜松医科大学児童青年期精神医学講座教授の杉山登志郎先生に、「そだちの凸凹（発達障害）そだちの不全（子ども虐待）」として、子どもの成長発達についてさまざまな視点から話題提供をしていただき、皆様と一緒に考える機会になると同時に、あらためて子どもの状態の複雑さを投げかけられた思いがします。

教育講演は、「モンスターペアレントとは言わない」と旗を揚げ、教育者の立場から保護者と教職員のトラブル、関係性が複雑になっていく実態を分析し、良好な人間関係をつくるために「イチャモン研究会」と名を打って二十数年前から

学会長を囲んで

シンポジウム

多くの職種と共有し研究している小野田正利教授にお話ししていただきました。具体的に多くの事例を説明していただきました。深刻な内容になりがちですが、先生の関西弁と大変ユニークな服装で会場は笑いながら、耳を傾けながら、患者・家族の多くの背景を感じ取ることができたのではないかと思います。特別・教育講演は、教育関係者に公開としました。

シンポジウムは、保健・医療・福祉・教育のつながりを考えていくために、臨床の実践者、教育者、地域の福祉の実践者、教育現場での医療実践者、患者・家族の皆様から忌憚のないご意見をいただきました。患者・家族の立場でお話しいただいた方は、お子さん自らがパソコンに打ち込んで講演いただきました。会場に参加していただいた方一人ひとりが、連携していく未来を描くことができたのではないかと思えるお話しでした。

昨年に続き、中高生参加のナーシング・サイエンス・カフェには、一般も含め24名の参加がありました。担当者には、看護の役割や仕事についてパネルや各種パンフレットを準備し、説明をしていただきました。口演73示説78の発表がありました。示説では、広い会場をお借りすることができ、参加者と発表者の意見交流が活発に行われました。緊急フォーラムでは、被災地からの報告と学会活動についての話がありました。震災後、「子どもたちの現状とできること」を継続していく活動が求められる企画でした。

学術集会長の任は、初めてのことでした。企画委員・実行委員の皆様、ボランティアの確保に快く協力していただいた看護教育関係者や小児科を標榜している各施設の皆様から、多大なご尽力とご支援をいただくことができました。開催期間中、運営についてご指摘をいただくこともありましたが、なんとか無事開催と終了を迎えることができたのも「チームワークと緊急時にも臨機応変に対応するフットワーク」で乗り切ったと思っています。

日本小児看護学会第21回学術集会に参加して

■ 佐々木　史恵（北海道立子ども総合医療・療育センター）

2011年７月23日～24日に日本小児看護学会第21回学術集会が開催されました。今回、私は看護師１年目で初めて本会に参加し、一般演題の発表を行いました。初めての学会参加で自分が感じたこと、考えたことについて記していきたいと思います。

今回の学会は、東日本大震災後初めての学会であり、学会の講演のなかでも震災から考えさせられたこと、震災を受けてこれから我々ができることについての話が多くありました。会長講演「小児専門病院管理者の視点から保健・医療・福祉・教育の絆を再考する」で語られたことは、大震災を通じて人と人とのつながりの強さや、多機関の絆の連携の難しさと重要さについてであり、私自身も震災を機に感じたことがあり、感銘をうけるご講演でした。子どもの取り巻く環境は時代や社会、地域の多様な文化が根付いている中で複雑となっています。それにあわせて多くの機関が多機能となり連携もより複雑となっています。その中で看護職の自分にできることは、継続した学習のもとで最新の連携について学び、それを踏まえ多くの選択肢を持ち、日々の業務に生かしていくことであると考えます。今後はそのことを念頭におき日々過ごしていきたいと感じました。

また、緊急フォーラムとして「東日本大震災－子どもたちの現状と私たちができること－」が開催されました。被災地からの実際の報告、そこから我々ができる具体的支援についての話し合いが行われ、自分だけでは漠然とした思いであったものが、自身ができること、やるべきことについて現実的に考えさせられました。

最後に、「小児外来で予防接種をうける２～７歳児へのプレパレーション－アルバムを使って親が行う説明の有効性の検討－」というテーマで一般演題の発表を行いました。想像していたよりも多くの人が聴いて下さって驚きましたが、自身の今までの経験やこの研究について多くの人に知ってもらい、少しでも一緒にテーマに向き合ってもらいたい一心で発表することができました。また、質問を受け、自分の気付かなかった視点や新たな考えを再考することができ、論文にするための良き手助けとなりました。今回の発表は自分にとって大きな一歩であったと思います。

今回の学会で得た様々な新しい知識や見解、自身の深めた考えは、今後の実践の場に生かしていきたいと思います。また、これからも自分のステップアップのために、様々なことを経験して学んでいく必要があると感じました。

委員会活動紹介　災害対策委員会

委員長：及川郁子
委　員：日沼千尋、濱中喜代、飯村直子、川口千鶴、平林優子、白畑範子、塩飽　仁、古橋知子、勝田仁美、三宅一代、吉野広美、小野智美、西田みゆき、眞鍋裕紀子

東日本大震災から８カ月が過ぎましたが、その被害の大きさからもまだまだ災害の影響が続いています。本学会は、これまで災害時の支援について検討してきませんでした。そのため、今回の震災時もどのように対応すべきかとても戸惑いました。情報を得る手立てがない、情報をどこにどのように発信すればよいのかわからない。手探りの状態で災害対策委員会は発足し、活動を続けています。今回、あらためて会員の皆様に、災害対策委員会の活動をご紹介致します。

災害対策委員会は、(1)今回の災害に伴う支援活動、(2)学会として災害時の対応に関するマニュアル等の整備、(3)関連機関・学会等との連携・協力、を目的に活動をしています。

(1)今回の震災等の影響による子どもたちやご家族、専門職等への支援活動としては、①相談窓口：専門職を対象とした「子どもの健康や生活」に対する相談窓口を開設しています。会員以外の方でもご相談できますので、どうぞ身近に相談したい方がおりましたらご紹介下さい（連絡先：jschnsodan@slcn.ac.jp）。②情報提供：学会ホームページ上で、災害に関連した関係資料や連絡先等について紹介をしています。新着情報など、随時情報を更新させています。掲載されていない関連情報などお気づきの情報がありましたら、お寄せ下さい。③災害支援金の受付は現在も行っています：少しずつ集まっており、10月時点で約90万円ほどです。活用方法については検討中ですが、できるだけ早くに子どもたちの支援に還元していきたいと考えています。（支援金口座：三井住友銀行蒲田支店　口座番号（普通）4771193　日本小児看護学会震災寄付金）④情報収集：今回の震災とそれによる原発事故など子どもたちやご家族への支援はまだまだ続いていきます。そのためには、子どもたちやご家族のニーズに迅速に応えていくことも必要でしょう。ホームページやメールなどを活用しながら、適時・的確な情報収集と対応について検討するための手段を検討中です。

(2)学会における災害時等のマニュアル作成については、災害等がない平時の活動、災害が発生した時の急性期から中期・長期的活動と、時期を考えながら検討しています。平時における災害の備えへの意識をどのように培っていくか、災害発生時の情報収集や発信のためのネットワークづくりなど課題が多くありますが、今回の震災支援を評価しながら進めて行きたいと思っています。

(3)関係機関・学会等の連携については、日本看護系学会協議会との連携窓口の開設、日本災害看護学会や日本小児科学会等とのホームページのリンクを行いました。また、「東日本大震災中央子ども支援センター及び協議会」が発足し（2011年10月）、日本小児看護学会も参加団体として登録致しました。この「東日本大震災中央子ども支援センター及び協議会」は、震災に伴う子どもたちへの継続的・長期的支援のために関係団体が集まって協働して協議・支援を行うことを目的にしたもので2018年３月まで続く予定です。今後、会員の皆様のご協力が必要になると思います。また、活動内容については随時ホームページなどで、ご案内していきたいと思います。

現在、災害対策委員会は15名のメンバーで、今年度の臨時委員会として活動していますが、１年で終わることのない継続的な活動を行っていかなければなりません。今後の委員会のあり方も含め、引き続き、会員の皆様のご支援・ご協力をよろしくお願い致します。

東日本大震災被災地からの報告 その1

■ 横内　由樹（宮城県立こども病院看護師長）

当院は病床数160床、建築構造は免震構造4階建てです。今回の大震災により、正面玄関車寄せ屋根（キャノピー）2基が倒壊したものの、病院本館が免震構造ということもあって、院内は入院患者・家族および職員等の人的被害、医療機器、建物・設備等に大きな被害はありませんでした。

ライフラインは、商用電力は遮断し、予備線復旧まで57時間、本線復旧まで69時間要しました。自家発電の途絶はありませんでした。上水道の断水はなかったものの、給湯ボイラーは2週間使用できませんでした。固定電話は復旧まで5日かかり外部発信・着信が不能となりました。

地震発生直後から商用電力復旧まで、最低量の自家発電の中で人工呼吸器を優先させ院内全体で節電し、モニターや輸液ポンプの使用制限を行いました。易感染状態であってもアイソレーターを使用できず、手洗いと速乾性手指消毒による感染予防に努めました。暖房停止のため、掛け物による乳幼児の体温保持に配慮しました。震災後3日目で湯沸しポットの使用を許可され、あたたかいミルク・湯たんぽが提供できるようになりました。物資供給が困難なため、衛生材料の使用および感染予防などの方法を一部変更し、物品の使用を抑えました。また、付添い以外の家族にプレイルーム、ファミリールームを開放し宿泊を許可しました。また、栄養管理部であたたかい食事がつくれるように職員がカセットコンロを持ち寄り、周囲の農家へ食材確保にまわりました。リネンサプライ業者の被災でリネン・タオル類が不足したため、リネンは必要最小限の交換とし、清拭タオルを個人用として配布し使用しました。薬剤部の在庫と納入予定を確認し、治療計画を見直し実施しました。職員の通勤用のガソリン不足が深刻なため、帰宅困難な職員を病院に宿泊させ、職員のための院内保育所を設置し、マンパワー不足を改善させました。

被災したこどもと家族を受け入れた際、震災についてあえて話題にせず、こどもと家族を見守ることを統一しました。また同時に生活支援物資の提供も行いました。

これまでの防災訓練では、地震後の火災発生という想定で、患者の避難誘導が中心でした。今回のような長期にわたる停電や断水などを想定したライフラインの確保、備蓄、生活援助の工夫などを再検討していく必要があると思います。

「リレートーク」駒松仁子さん

東日本大震災で被災された方々に、心よりお見舞い申し上げます。

自己紹介

国立岡山病院附属看護学院を昭和40年に卒業、その後、国立岡山病院に就職しました。そして平成21年3月、国立看護大学校を最後に定年退職しました。退職後はゆっくりと過ごすことを考えていましたが、東京学芸大学教育学部（養護教諭課程）や秋草学園短期大学地域保育学科で、非常勤講師をしています。小児看護の近接領域で教育にかかわれることを幸せに思います。

看護師になったきっかけ

私が小学校入学直後、父が亡くなりました。それを契機に、医師になることを志望していましたが、諸般の事情で医学部への進学を諦めました。まず看護師になってから、医学部受験をしようと考えて看護の道を選択しました。実際、仕事をしながら受験勉強をしました。その過程で看護する喜びを見出し、看護師を続けることを選択し、現在に至りました。

小児看護との出会い（新人時代の思い出にかえて）

看護学生のころから小児看護は好きでしたが、細かいことは苦手だったので、小児看護には適性がないと考えました。慢性疾患の成人看護に関心があり、卒後10数年間は結核病棟やハンセン病療養所、邑久光明園附属准看護学校に勤務しました。30代半ばの頃、慶応義塾大学（通信教育課程）で学ぶために、国立病院医療センター（現国立国際医療研究センター）に転任してきました。

都立医療短大 研究室にて（40代中頃）

小児病棟婦長の辞令を手にしたとき、小児看護の経験が全くない私がまさかという思いが胸中を去来したものでした。最初の3年間は大変悩み、苦労も沢山ありました。しかし、幼い子どもたちが病と闘うその姿の中に多くを学び、逆に励まされた日々でもありました。

9年間にわたる小児病棟の勤務後、東京都立医療技術短期大学に転任しました。その動機は、臨床看護体験を通して学んだことを、これから看護を学ぶ若い人たちに伝えたいと思ったからです。平成3年8月、吉武香代子先生の呼びかけのもとに、日本小児看護研究学会の発起人会が私の勤務する短大で開催されました。その学会も20年の歳月のもとに素晴らしい発展を遂げていること、大変嬉しく思います。

小児看護の魅力

一言でいえば、成長過程にある子どもとその家族のケアにかかわることです。臨床を去った後に、かつて勤めた小児病棟に入院されていた小児がんの子どものご家族に、今まで受けた医療や看護についての面接調査をさせていただきました。それを契機に、小児がんの子どもの親の会が発足しました。小児病棟で出会った子どもとご家族とのかかわりは様々な形で現在も続いています。入院体験が子ども自身や同胞に及ぼす影響の大きさを再認識することもしばしばありました。入院していた子どもたちの成長過程を伺うたびに、小児看護にかかわった喜びをかみしめています。

ストレス解消法

コーヒーを飲みながらおしゃべりをすること、そして寝ることです。

後輩たちに期待すること

現在、医療の場は高度に機械化されています。子どもと家族のケアにおいて、十分なかかわりの時間をもつことが困難な状況にあります。しかし、温かい心のこもったケアは回復力、さらには生きる意欲を生み出します。どんなに短い時間であっても、子どもや家族と正面から向き合う姿勢を大切にして、子どもの秘められた可能性が引き出されるようなかかわりを期待しています。

バトンを受けて欲しい人 村田恵子さん

日本小児看護学会　第22回学術集会ご案内

メインテーマ：どこにいても子どもと家族に確かなケアを

【会　　期】
2012年７月21日(土)・22日(日)

【会　　場】
マリオス・いわて県民情報交流センター（盛岡市）

【演題募集期間】
2012年１月６日(金)正午～
2012年２月20日(月)正午

【参加費用】
事前登録：会　員　9,000円
　　非会員 10,000円
　　学　生　3,000円
当日登録：会　員 11,000円
　　非会員 12,000円
　　学　生　3,000円

【プログラム】
会長講演：「子どもと家族にとっての確かなケアをめざして（仮）」
　　白畑範子（岩手県立大学看護学部　教授）
特別講演：「想定外を生き抜く力
　　～大津波から生き抜いた釜石市の児童・生徒の主体的行動に学ぶ～」
　　片田敏孝（群馬大学大学院　教授）
教育講演：「10代の子どものこころ～思春期外来から見えるもの～（仮）」
　　青木省三（川崎医科大学　精神科学教室　教授）
シンポジウム：「子どもと家族への＜確かなケア＞を考えよう（仮）」
テーマセッション(仮)：「虐待一次予防～小児医療における看護師の役割～（仮）」
　　「子どもへの『命の教育』における小児看護師の役割（仮）」
　　「子どもと家族の意思決定を支えるケア（仮）」　他
エキスパートパネル(仮)：「小児看護教育」／「プレパレーション」／「在宅支援」他
その他：交流集会
一般演題発表（口演・示説）／懇親会

【第22回学術集会 URL】http://www.jschn2012.umin.jp

【事務局】学術的なお問い合わせ：
〒020-0193 岩手県滝沢村滝沢字巣子152-52 岩手県立大学 看護学部
E-mail：syounikango@ml.iwate-pu.ac.jp
演題登録，運営に関するお問い合わせ：
〒020-0011 岩手県盛岡市三ッ割字久保屋敷13-21
有限会社ヤマダプランニング
Tel：019-663-1801　　E-mail：jschn@yamada-planning.co.jp

第９回(2011年度)中国地区地方会　開催報告

第９回（2011年度）中国地区地方会は、「病気や障がいをもつ子どもと家族の成長を支える看護　～医療的ケアが必要な子どもと家族を支える多職種との連携と協働～」をテーマに、島根大学医学部看護学科の矢田昭子氏を実行委員長として、６月18日（土）に同大学にて開催しました。

専門看護師の笹木忍氏（広島大学病院）による基調講演「病気や障がいをもつ子どもと家族を支える看護師の役割」では、医療者と家族との思いにずれが生じた場合は直接家族に事実を確認することや、他職種とはお互いが共通理解をしながらケアを提供できるように連携・調整することが看護師の役割であるなどの話がなされました。

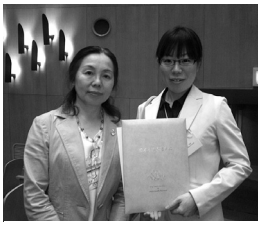
シンポジウムでは「多職種と連携協働したアプローチを考える～」をテーマにし、看護師の立場から板倉千栄氏（島根大学医学部附属病院）は、入院時から子どもと家族の療養生活を描き、早期に退院支援の必要をMSWに情報発信すること、保健師の立場から遠藤まどか氏（隠岐支庁隠岐保健所）は、連携・協働するには支援者間での情報の共有や役割の明確化が重要であること、訪問看護師の立場から廣瀬文美氏（斐川訪問看護ステーションさくら）は、要望として退院前に在宅での支援が必要なケースを見逃がさずに地域に情報発信をしてほしいと話されました。教員の立場から岸佳代子氏(島根県立松江緑が丘養護学校)は、健康状態が不安定な子どもへの教育を実践するには学校看護師との連携は不可欠であること、家族の立場から16歳の娘を介護している母親は、日常的に関わる支援者には子どもと家族の心の支えになってほしい、高い専門性を備えた看護師による支援の必要性について話されました。

約100名の方々にご参加頂き、終了後のアンケートでは回答者の約９割の方から、全体として「大変良かった」「良かった」と評価して頂くなど、盛会裏に終了することができました。

～ おめでとうございます ～

2010年度研究奨励賞受賞論文

2009年度発行の日本小児看護学会誌18巻２号と３号、19巻１号に掲載された原著・研究報告論文15編の中から、選考の結果、下記の１編が受賞されました。(学術交流推進活動委員会)
高谷恭子、中野綾美（2010）：慢性状態にある思春期の子どもと親が辿る軌跡－共鳴する苦悩に生きる意味を見出す－．日本小児看護学会誌．19（１）．17 - 24.



理事長とともに

病院における子どもの権利擁護啓発ポスター　キャッチコピー採択者

病院における子どもの権利擁護啓発ポスター「子どもの人権は守られていますか？」に18件の応募があり、下記の方のキャッチコピー３件が採択されました。ありがとうございました。ポスターはホームページからダウンロードできますので、ご活用ください。(健やか親子21推進事業委員会)

・清水いづみ氏（中部大学生命健康科学部保健看護学科）
「私にもおしえて　きっとわかるよ」
・林原健治氏（神奈川県立保健福祉大学）
「わたしができるまで　待っててね」
・齋藤麻子氏（順天堂大学保健看護学部）
「わたしだって　自分でできることある」

◆ 編 集 後 記 ◆

日本小児看護学会ニュースレター第39号をお届けします。

前号から始めた委員会活動紹介では、３月11日の東日本大震災を受けて発足した臨時委員会「災害対策委員会」の活動を取り上げました。また、新たに「被災地からの報告」を企画し、会員の皆さまと情報共有するとともに、今後の子どもと家族へのケアにつなげていきたいと考えております。学会ＨＰ（http://jschn.umin.ac.jp）では、東日本大震災関連情報を随時更新・掲載し、専門職向けのメール相談も受け付けておりますので、ぜひご活用ください。

広報委員会メンバー
委員長：武田淳子
委　員：塩飽　仁，白畑範子，今野美紀，遠藤芳子，大池真樹